

生活様式の上では、この地域は、ごく少数の非農村と、大部分の農村とに区分され、その境界線も市町村境界線と深いかわりを持たないこと、農村の生活様式を分類してみても、やはり市町村境界線と深い関係はなく、殆んど同質と言っても良い地域に境界線が引かれた、という形になっていることが、明らかになった。

## 埼玉県比企南丘陵における集落発達に 関する地理学的考察

金 指 みどり

〔目的〕 埼玉県ほぼ中央に位置する、比企南丘陵を取り上げ、平野にも、山地にも属さない丘陵地における集落発達の特徴を、各集落の成立年代を究明することによって、明らかにすることを目的とする。本地域は、行政区画でいうと、東松山市南部、嵐山町南部、鳩山村全域に当たる。

〔研究の枠組〕 以上の目的を達成するためには、過去における本地域の復元が必要である。

自然環境についても復元をしなければならないが、本論文では弥生時代、古墳時代前期を除き、現在とほぼ同じとして考察した。第二章では自然環境の中でも、集落立地と関係が深い地形、地質について述べた。地形については空中写真、野外調査等により、地形区分を行い、地質については、第三紀層上部と、丘陵全体に発達している物見山礫層を調査した。

第三章では、現在の集落の立地条件、分布形態、密度、機能として農業について述べ、まとめとして、農業集落区分を行った。この農業集落区分によって、現在の集落の特徴をつかむとともに、集落の成立、発展を考える上での重要な資料とした。

第四章は、本論文の目的である集落発達について、各時代ごとに様々の資料を使い、集落の様子を復元していった。

古代は、弥生、古墳時代集落址、古墳分布、奈良、平安時代窯跡群、交通路、条里遺構、和名抄郷名配置、寺院の動きから、また、中世は、集落址として追うことができないため、武士の城館跡、寺院の動き、関東地方特有の墓地に建てられた板石塔婆の分布、鎌倉街道の分布を使用した。特に板石塔婆には、建てられた年月日が入っているので、かなり詳しく集落の様子を知ることができた。

近世に入ると、一般に文書が多く残っているのだが、本地域、特に丘陵内では殆んど無く、新編武蔵国風土記稿を主に使用した。その他、埼玉県史、東松山史稿などによるしかなかった。

明治時代は武蔵国郡村誌を分析し、それ以降は、古い統計と、地形図によって考察を進めた。

〔結果〕 本地域の集落は、まず本地域東部、高坂台地上に成立し、丘陵周辺の経済力の向上とともに、丘陵内に開発の手が伸び、奈良時代から平安時代になってから、集落が成立していった。

これは、丘陵周辺には都幾川、越辺川が流れ、また低地が前面に広くあり、広い水田を開くことができるし、他の地域との交流も容易である。しかし、一方丘陵内では、細い谷ごとの谷津田しかないし、河川も無い集落立地には、極めて不利であり、谷津田と、溜池を造る技術が入ってくるまで、集落はなかったであろう。

次に開発されていったのは、丘陵周辺の低地に立地する集落と、丘陵内でも、辺地である。こうした大規模な開発は主に鎌倉時代に行われた。

このようにして、平安時代末には現在ある集落の $\frac{2}{3}$ が成立し、中世末までには、残りの集落も成立していたことが判明し、本地域の集落が、いかに長い歴史を持つものかがわかった。そして、本地域では常に、拡大、発展の作用が、丘陵周辺から内部に及ぶというパターンが繰り返されていることもわかった。これは、先に述べた丘陵周辺と内部の、自然条件の差に基づくものだと考えられる。

## 長岡市の商業

金 容 子

研究範囲に決めた新潟県長岡市の地域的特色として、県中部の中心都市で商工業が盛んな都市である、交通上の要衝地である、百貨店・喫茶店が都市規模の割には多数立地している都市である、などを挙げることができる。これらの特色は商業を長岡市の代表的産業たらしめる要因であり、そこで本論文では、これらの特色と商業発展との相関関係を明らかにし、長岡市の商業の地域性を考察することを研究目的とする。商業は卸売業、小売業に大きく分けられるが、卸売業については主にその発展過程、商圈について、小売業については長岡市を代表する中心商店街の構造と顧客圏について考察することにした。

本論文の枠組は 四章に分け、第一章では自然条件、人文条件両面より地域を概観し、第二章では産業の発展過程として、工業の発展過程、それに伴う農業の衰退、商業の発展過程について資料、文献などにより調査した結果を述べた。第三章では中心商店街の商店街力の圧倒的な強さを明らかにし、中心商店街の構造と魅力、市内地区、周辺市町村別に顧客圏について考察し、最後に、長岡ニュータウンの建設に伴い変貌しつつある長岡市の将来像と要約を述べまとめとした。

研究の結果、長岡市は古来より信濃川と深い関係を持つ河川交通上の要衝地であって、この地の利を生かして周辺地域に商圈を拡大して行った繊維品類を代表業種とする卸問屋町であった。そして信越本線、上越線の開通により陸上交通上の要衝地に移り、卸問屋はさらに商圈を広げ飛躍発展した。現在の卸売業は主として狭い範囲の後背地を販売圏としているが、県外では仕入先、販売先ともに関東地域が主で、長岡市は関東経済圏に含まれている。従って長岡市の今日の商業の発展は、交通の発展とともに歩んで来た卸売業を布石にしてもたらされた。小売業については、長岡市の小売業の1店当りの年間販売額は、県庁所在都市で年間販売額県内一位である新潟市よりも大きい。そして小売業を営む店舗の組織体である市内商店街の中でも中心商店街に対する消費者の買物支持率が非常に高く中心商店街力が圧倒的に強い。従って長岡市の小売業の販売力の強さは中心商店街力に大きく依存していると考えられる。この中心商店街力の強さは、交通至便な所に立地している、百貨店をはじめとする大規模店や喫茶店、その他種々な魅力ある商店が多いなどに基づいている。さらに商店街は市民と流入者に商品を供給することを業務とするので、市内地区、周辺市町村別に中心商店街の顧客圏を最寄・買回品支持人口率、時間距離、通勤・通学依存率を指標として調べた結果、市内各地区や近距